

# 響の放浪記

トロイトロール



# 目次

響は目を覚ます	1
妖精さんと魔改造	5
初めての海戦	8

響は目を覚ます

「んっ」

もぞりと動き、閉じた瞼の上から降り注ぐ日光を感じる。

睡眠欲求に抗いながら、日光を腕でさえぎってその重い目蓋を開いた。

さざなみの音が優しく打ち寄せてきて、またもやその場で眠ってしまいたくなる。

もつと寝ろと主張する体に鞭打って、腹筋に力を入れ、勢いをつけて起き上がる。

しかし、寝起きのせいで力がうまく入らず、勢いのまま立つことは出来なかった。

そのまま座り込んで、あたりを見渡す。

白い砂浜が、太陽の光を反射して、目に突き刺さるようだった。

そして、わたしの後ろは熱帯に生えているヤシやシダなどが生い茂り、ジャングルとなっていた。

私の手や腕は、白磁のように白く、傷ひとつなかった。

被っている帽子を手にとると、そこにはソヴェエト社会主義国連邦、通称ソ連のあの特徴的なマークがあった。

かつては資本主義経済のアメリカ率いる西側、NATOと、社会主義のソ連率いる東側、ワルシャワ条約機構が一切戦火を交えない冷たい戦争、冷戦を起こし、その代理戦争として朝鮮戦争、ベトナム戦争などの悲劇が起こった。

そして、デタントや核軍縮の動きを米ソが見せ、冷戦が1989年にマルタ会談で終結。

しかし、その後すぐにソ連はあつけなく崩壊し、ここにかつて米国と肩を並べたひとつの国は崩壊した。

そこまで思い起こして、ふとなぜ私はこんなことを知っているのだろうかという疑問に思った。

確か私はソ連に賠償艦として引き渡された後、ヴェールヌイとなつてソ連海軍の駆逐艦となり、その後練習艦デカブリストとして余生を

過ごした。

1980年代以降のことなんて知らないはずなのに、知っている。でも、知らないはずの知識も、ひどく他人事のような、要するにただの歴史上に起こった物事としか感じられず、本当にただの知識のようだった。

第二の祖国、ソ連の崩壊もそうなのかとしか思わない。

反対に、大日本帝国の敗北と、日本国の誕生、それから第二次世界大戦のときの記憶は生々しい。

次々と沈んでいく仲間、終わりの見えない戦いのなかで国全体が疲弊していった。

戦いの中で海に還っていった仲間たちを思った瞬間、胸がずきりと痛んだ。

そして、とてつもない孤独感と寂しさが頭の中で暴れまわった。

とくに特III型駆逐艦を思うと、胸が張り裂けそうになった。

どうやら、こちら辺は私には思い浮かべることが禁忌らしい。

いったん海水で顔を洗い、思考をクリアにする。

そして、改めて自分が知るはずのない知識を知っているという事実について、考える。

すると、自分の知らないはずの、しかし知っている、家のなかの自室が思い浮かんだ。

親が死んで、ふさぎこんでしまい、家の中に引きこもってしまった日々。

お金は親の遺産で一生暮らしていけるほどあったが、そんなことよりももつと両親にいてほしかった。

そんな感情が思い出された。

段々と状況が分かってきた。

ようするに、この妙な知識はこの娘のものようだった。

かといって、この娘が私の中で生きているということもなく、本当に残滓としてあるくらいだった。

とりあえず、自分の内面に整理がついたところで、海を見る。いつの時代にも変わらない海。

時にはその牙を向けることもあるが、いつもは穏やか。そして、かつて多くの命が散った墓場。

その水平線上から、見慣れぬ黒い物体がその姿を現した。とたんに、本能が警鐘を鳴らす。

体が、自然と戦闘へと意識を向けていく。

黒い物体が、私に向けて口の中の砲を向けた。

わたしは本能で知っている艦装の取り扱い方を想起して、手元に主砲を出す。

てつきり、50口径三年式12.7cm砲が出てくると思ったけど、130mm口径・70口径長のAK-130が手元に現れた。お互いが、砲を向け合って硬直している。

私は、相手が撃つてこなければこちらも撃つつもりはなかった。

万が一相手を撃沈しても、正当防衛で言い訳が効くからだ。

そうして、お互いが睨み合って数分。

黒い物体は徐々にこちらに近づいてきた。

警告のために、空に向けて一発撃つ。

黒い物体は止まった。

こちらが敵意から警戒に切り替えると、相手は困惑したようにその巨大な体を捻った。

まるで首をかしげるように。

こちらが砲をおろすと、あちらも砲を口の中にしまった。

なんなんだろう。

とりあえずこちらに来るように促す。

相手も恐る恐るといった感じで島に近づいてきた。

「なにがしたいんだ？」

手で触れるところまでやってきた黒い物体に、疑問をぶつける。

しゃべれると思っていなかったのだから、期待していなかったが、突然相手の気持ちはこちらに入り込んできたことに驚く。

曰く、どうして攻撃しないのかと。

艦娘と深海棲艦は殺し合うのではないのかと。

「そういうものなのかい？」

うん、と黒い物体はうなづく。

「なら、やるかい？」

ジャキツと黒い物体の頭にAK—130を突きつけると、やりたくないです、と喋ってかなりの恐怖を垂れ流している思念が流れ込んでくる。

「ブツ」

ふざけて突きつけたけど、どうも相手は本気で捉えてしまったらしく、その反応が可笑しかった。

冗談でもやめて、といった様子で、短い足でべしべしとこちらを叩いてくる。

もはや、そこには敵意などというものは存在しなかった。

## 妖精さんと魔改造

黒い物体に名前を尋ねても、特にこれといった名前がないことが分かった。

強いて言うならば、本人？は駆逐艦というらしい。

名前ではなくて、種類といったところか。

「それじゃクーちゃんでもいいかい？」

適当に考えた名前を目の前の駆逐艦に言ってみると、それでいいというような感じの思念が流れ込んでくる。

性別は不明だけど、なんとなく男という感じもしなかったので、ちゃんづけ。

「私は響、またはヴェールヌイ、あるいはデカプリスト。長いから響と呼んで」

了解、と短い足で敬礼をするような仕草をとるクーちゃんにほっこりする。

そういえば、さっきの主砲はAK-130だった。あれは1980年代に配備され始めたもので、本来わたしには積まれるはずもない兵装だった。

それに自分の艦装を見れば、AK-630M 30mm CIWSも載っているし、魚雷発射管の中身を見てみればおそらくシグヴァル。

とんでもない魔改造の施された武装がつまれていることに、すごく疑問を感じた。

まあ使えるのならばそれでもいいのだけれど、弾薬の補充やメンテナンスができるとは思えない。

12.7cm連装砲や長10cm砲ならば、どう扱うのかも、メンテナンスも分かる。

でもAK-130やCIWSはあの娘の知識だから、そんなに詳しいわけではない。

『オハローデス』

『オデハー』



そんなことを考えていると、2頭身の謎の生物が現れる。

彼女ら？は踊ったり、ウトウトしていたりとなかなかマイペースだった。

「貴方たちは？」

『ヨウセー』

『ギソウノテンケンハオマカセ』

『ギソウノコントロールモバツチリ』

どうやら妖精、というらしく、艦装のあれこれについては彼女たちがやってくれるらしい。

『トイウコトデ、ギソウヲミセテチヨ』

手に持っていたAK-130と、背負っていた諸々をおろすと、妖精たちの前におく。

『コレハコレハ』

『スヴァラシイ』

『ヨウセイノナカデモワタシタチシカシラナイモノ』

彼女たちはすごく興奮していることが伝わってくる。

そんな妖精たちを尻目に、私は次のことを考え始めた。

くーちゃんがいうには、艦娘、つまり私と、深海棲艦、つまりくーちゃんとは本来敵対している。

くーちゃんとはもはや双方にそういった気持ちもなく、むしろ仲間としての意識のほうが強い。

おそらくくーちゃんが襲われたらそいつらを攻撃するくらいには。

話を戻すと、くーちゃん以外の深海棲艦とは戦闘になる確率が非常に高い。

いまのところ燃料や弾薬といった必要なものは大して消費していないため、艦装に満載されている。

それでも使い続けられなくなるし、とくにシグヴァルなんかはどうやって手に入れたらいいのか分からない。

「で、どうにかなんないのかい？」

艦装を興奮しながら弄くっている妖精に聞いてみた。

『ダンヤクヲモツテクレバワタシタチガツクル。ダンヤクヤネンリヨ』

ウハソコラヘンノテキカラウバエバイイ』

なるほど、なんとも単純な話。

敵から奪って来い、ということだった。

「くーちゃんのほうも頼めるかい？」

『オヤスイゴヨウ。シンカイセイイカンノギソウライジクレルナンテ、オモシロソウ』

話がついたので、くーちゃんの砲と機銃、弾薬をおろして妖精たちの一部はくーちゃんの艦装を見始めた。

おほーつと喜んでいる妖精たちを観察していると、なにやら作り始めた。

機銃とくーちゃんの持っていた鋼材を材料にして、砲身やレーダー、弾薬ベルトを作り出していく。

それらを組み合わせれば、AK-630Mの完成。

それをくーちゃんの口の中に搭載して、妖精たちは大仕事を終えた男たちのように実にいい笑顔でこちらにサムズアップした。

すごく、自由人です。

自分のやりたいことはとことんやるような、そんな生き物たちなんだろうなあと私はそのとき思った。

## 初めての海戦

島をあらかた探索し、食料などを探し、初日を終えた私は、木陰にこしらえた葉っぱのベッドでくーちゃんと共に睡眠をとり、二日目の朝を迎えた。

いよいよ、響としては久しぶりの海上航行に望む。

きちんと装備の整備もし、くーちゃんと共に弾薬や燃料も満載してある。

「それじゃあいこうか」

抜錨！とくーちゃんは言い、はじめの一步を踏み出した。

水上を滑るように、私は海上を移動している。

くーちゃんは水しぶきを上げて豪快に突き進んでいた。

お互いに爽快感を感じながら、穏やかなクルージングを楽しむ。

ときおり、くーちゃんの体を撫でたり、くーちゃんに引っ張ってもらったりしながら、航行の経験をつんで行く。

そんな楽しい時間を邪魔する影が、レーダーに移りこんだ。

「所属不明の艦隊、数は6、空母2、巡洋艦2、駆逐艦2」

レーダーからの情報をくーちゃんに伝える。

空母に航空支援なしで突っ込むなんて危険なことできないので、大人しくその艦隊から遠ざかる。

くーちゃんもその点は賛成みたいだ。

『コレハカムスジャナイ。シンカイセイカン』

レーダー担当の妖精が、艦隊の正体を教えてくれる。

相手のレーダーに対して妨害電波を発し、目を潰す。

その間に、最大戦速でその場をあとにした。

敵がレーダーの範囲から消え、普通速度にもどす。

「資源を奪おうにも、空母相手じゃ無理だね」

『ナラ、スライセンタイヲオソエバ』

「攻撃してきたらね、でもクーちゃんは深海棲艦を襲うのは大丈夫なのかい？」

大丈夫、というように、クーちゃんは頷く。

見も知らない奴等よりも、自分の仲間のほうが優先、といった感じらしい。

それに仲間を襲うやつは沈める、とも意気込んでいるようだった。

普通は敵同士なのだろう、艦娘と深海棲艦である私とクーちゃんの間には確かに仲間意識が芽生えていることに、しかも独りではないという安心感も得られてうれしくなる。

ありがとう、という感謝の気持ちをこめて、ただ優しくクーちゃんを撫でた。

そうして、ついにレーダーに水雷戦隊を捉えた。

「駆逐艦4、巡洋艦2」

相手に近づき、撃ってくるかどうかを待つ。

そして、彼我の距離が敵の主砲の射程圏内に入ったとき。

鈍い音がして、私に向けて計14門の砲火が襲い掛かる。

その中を、あえて突き進む。

砲弾が、私の頭の上を飛び越えて後ろに落ち、水柱を上げる。

クーちゃんは、私とは反対側から挟撃の形で攻める。

クーちゃんの5インチ連装砲が火を噴き、近くの駆逐艦に狭叉する。

私は、AK-130を毎分90発の連射速度で巡洋艦にダメージを与え続ける。

正確に着弾し続ける130mm砲弾は、巡洋艦を爆発と破片で傷つける。

そして、巡洋艦の魚雷発射管に命中。

爆発を引き起こすと、そのまま撃沈せしめた。

残りの巡洋艦には、魚雷をプレゼントする。

敵の魚雷にシグヴァルを当てて相殺し、残ったシグヴァルは200ktで巡洋艦に突き進む。

敵は回避行動をとった。しかし、もう遅い。

巡洋艦のごく近くや、真下を通ったシグヴァルは、爆発して巨大な水柱を上げる。

そして、くーちゃんのほうを見る。

巡洋艦を2隻撃滅する間に、くーちゃんが駆逐艦をできるだけ片付ける。

そんな作戦ともいえない役割分担を一応はしたけれど、その役割が終わった今、くーちゃんの支援を全力でやるべき。

くーちゃんはどこどころに被弾のあとがあり、魚雷をばら撒きながら砲撃戦を行っている状態だった。

こちらを向いている2隻の駆逐艦の口腔に130mm砲弾を撃ち込み、沈黙させる。

そして、くーちゃんの5in砲弾が敵に直撃し、一隻を撃沈。

残りの一隻にも、くーちゃんの魚雷が命中し、もはや戦闘続行が不可能。

二隻だけ残ればいいと妖精は言っていたけれど、運よく3隻の資源が手に入った。

そして、3隻の駆逐艦の脳天をくーちゃんの5in砲で撃ちぬき、完全に沈黙させた。

その残骸に、妖精たちを乗せる。

ときばきと妖精たちは残骸を資源に変えると、海上で私のAK130とシグヴァル、くーちゃんにもシグヴァルと5in砲弾を補充した。

戦闘で消費した分におつりがくるほど、収支はよかった。

満足のいく結果に、くーちゃんと私は大満足。

そのまま、道中の敵を避けて、島へと戻った。